（様式６）

平成２７年度「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」
委託業務報告書【推進地域】

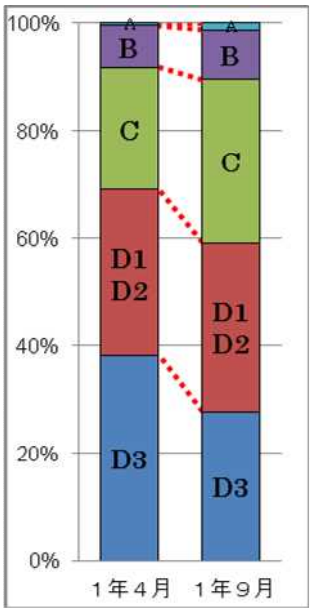
番号	３９	都道府県市名	高知県

１　推進地域における学力に関する現状

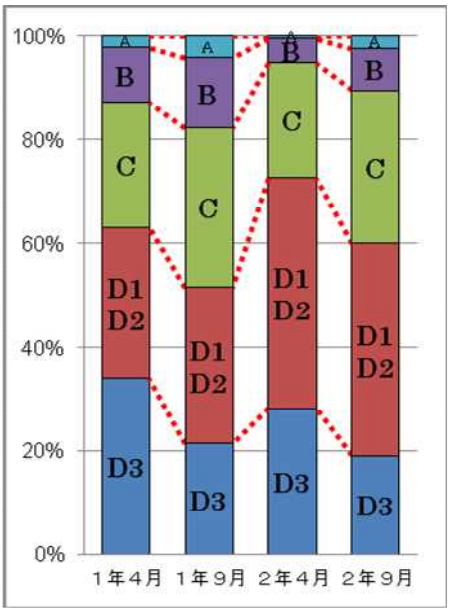
本県では、基礎学力の定着等に関する課題に対応するために、平成２４年度から、すべての県立高等学校の全日制及び定時制昼間部の生徒を対象として「学力定着把握検査」を実施し、その結果に基づく学力向上対策の研究とその成果等を共有する取組を行っている。１年目の平成２４年度は１年生を対象に年２回、２年目の平成２５年度は１・２年生を対象に年２回の検査を実施した。そして、３年目となる平成２６年度には、１・２年生対象の年２回の検査に加えて、３年生を対象に年１回の検査も行い、高校３年生進級時までの学力推移を調査分析の対象とした。そのことによって、本県の高校生の学力・学習習慣等の状況を、全国的な共通の指標に基づいて把握できるようになり、今後の取組の方向性を明確にすることができた。検査結果の概要は、下のとおりである。

図表１　平成２６年度在学生（Ｈ２４～２６入学生）の学力の推移

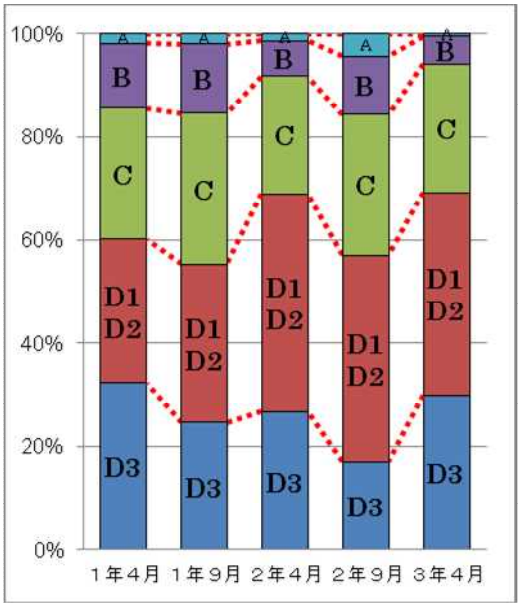
H26 年度入学生の学力推移



H25 年度入学生の学力推移



H24 年度入学生の学力推移



※　学力定着把握検査のうち、基礎力診断テスト受検者（併設型中高一貫校及び高知市内の高等学校の一部を除いた３０校（以下同様））の国数英の３教科総合による各学力層の割合

※　Ａ：国立大学合格レベル
　Ｂ：公立大学一般入試合格レベル、国公立大学推薦入試合格可能レベル、私立大学一般入試で選択肢が広がるレベル
　Ｃ：私立・短期大学・専門学校の一般入試に対応可能なレベル
　Ｄ：上級学校に進学可能だが授業についていけず苦労するレベル（うち、Ｄ３は義務教育内容が未定着なレベル）

図表２　平日の１日の平均学習時間（Ｈ２６年度調査結果）　(%)

		３時間以上	２時間程度	１時間半程度	１時間程度	30 分程度	15 分程度	ほどんど学習しない
H26 年度入学生	４月	1.9	12.0	16.3	28.5	17.2	5.7	18.4
	９月	1.0	5.2	9.2	21.6	19.3	7.8	35.7

		３時間以上	２時間程度	１時間半程度	１時間程度	30 分程度	15 分程度	ほどんど学習しない
H25 年度入学生	４月	0.8	3.7	6.0	13.9	16.7	7.3	51.6
	９月	1.2	4.4	7.2	12.7	14.9	7.3	52.3
H24 年度入学生	４月	1.5	4.7	5.8	14.5	13.1	6.7	53.7

※　学力定着把握検査のうち、基礎力診断テスト受検者（３０校）の結果

平成２６年度においては、本調査研究に取り組むことによって、推進地域として、生徒の主体的・協働的な活動を取り入れた授業づくりの進展や各校の学習指導体制の改善等の成果を得た。しかしながら、検査結果においては、本県の高校生の学力等について、依然として次のような課題があることが確認された。

○　高校入学時に、義務教育段階の基礎学力が未定着の生徒が多い。また、短期的には指導の成果による学力向上がみられるが、学年進級時に再び学力が下降する傾向がみられ、学力の確実な定着・向上につながっていない状況がある。また、その結果として、高校卒業時に、高校１年生で学習した必履修科目の内容を十分に習得できていない生徒も少なくない。

○　多くの学校で、高校入学後に家庭学習時間が減少する。基礎力診断テスト実施校では、高校２年生の約半数が「授業以外でほとんど学習しない」と回答しており、その状況は、高校３年生への進級時まで継続する。

○　組織的な指導や授業改善の取組が進みつつあるものの、主体的に学習に向かう姿勢を身に付けさせることや学習意欲の向上を図ることが十分にできていない。

○　学力定着把握検査と同時に実施している高知県オリジナルアンケート（別添１）の結果からは、高校入学後に、「新聞をほとんど読まない」、「携帯電話やスマートフォンなどの情報端末機器の使用時間が長い」等の生活習慣上の課題が明らかになるとともに、「将来の夢や目標を持っている」等の進路意識や、「私は自分のことが好きである」等の自己肯定感が低い傾向にあることが分かる。

２　平成２７年度における調査研究課題

１で述べた本県の高校生の学力等における課題に基づき、推進地域において調査研究課題として重点的に取り組んだ内容は、次のとおりである。

○　高校入学時から高校３年生までの学力推移の分析等に基づき、基礎学力の確実な定着や主体的に学習に向かう姿勢を身に付けさせるための有効な指導方法を研究する。

○　学習意欲の向上と早期の進路目標の明確化を目指して、各校における組織的な指導・支援体制の構築を推進する。

○　生徒の学力と生活習慣・進路意識等との相関について調査・研究を進め、学力向上につながる要因の分析と指導の手立てを探る。

このような本県全体の調査研究課題に基づき、推進校である室戸高等学校においても、平成２６年度に引き続き、「基礎学力の定着と学力向上のための授業実践」及び「学習意欲を高めるための地域を題材とする体験的教育プログラムの開発」の２点を主要なテーマとして、組織的に研究を行った。

３　研究の内容

（１）推進地域の取組

本年度の調査研究課題に対して、推進地域として、次の取組を行った。

① 学力定着把握検査の実施及び結果分析

学力定着把握検査のうち基礎力診断テスト対象校（３０校）については、３年生までを受検対象とし、県全体の生徒の学力分析を行った。また、各教科各分野の正答率の状況や各回の学力推移の把握に基づき、つなぎ教材の作成や学習支援員の活用等、学力向上に向けた施策を進めた。

② ＰＤＣＡサイクルを意識した組織的な指導体制を支援する学校訪問

各校において、学力定着把握検査の結果等を踏まえたうえで、生徒の学力向上に関する重点目標や具体的な取組を整理するため、「学力向上プラン」の様式を新たに作成し（別添２）、各校でのＰＤＣＡサイクルを意識した組織的な学習指導体制の構築を支援した。また、県教育委員会の指導主事・管理主事が、６月と１１月に県内すべての高等学校に学校訪問を行い、授業参観による授業改善に関する指導・助言や、管理職・教科担当・進路指導担当教員等との学力向上をテーマとした協議を行い、各校の指導・支援体制の強化を図った。

③ 学力定着把握調査等の分析結果を活用した指導方法・指導体制の研究

学力定着把握調査と同時に実施した高知県オリジナルアンケートの結果を活用し、教育センターと連携して、学力と生活・意識等との相関の分析から、学力向上に必要な要素や有効な指導方法等についての研究を進めた。

（２）推進校の取組への指導・助言

推進校である室戸高等学校に対しては、６月・１１月の学校訪問に加え、年２回開催した学力向上推進協議会及び視学官による学校訪問等を通じて、「基礎学力の定着と学力向上のための授業実践」及び「学習意欲を高めるための地域を題材とする体験的教育プログラムの開発」という２つのテーマについて、組織的・計画的な取組を推進するための指導・助言を行った。

① 県教育委員会の指導主事等による学校訪問

推進校が作成した「学力向上プラン」をもとに、生徒の学力の現状及び各取組の状況、今後の取組の方向性等について協議を行った。そのなかで、取組を一層推進するために、主に次の３点を指摘した。

・自主学習ノート（ドリカム帳）の活用により、学習習慣の定着（家庭学習時間の維持）については一定の成果がみられる。しかし、自主学習の質をどう高めていくかについては、今後の検討課題である。

・数学の「教え合いタイム」をはじめ、生徒の主体的な学びを高める特徴的な取組も成果をあげている。今後はこれらの取組を、教科の枠を越え、いかに学校全体のものにしていくかが課題である。

・授業改善を学校全体で推進するために、県内の他の学校では、「授業改善のポイントの共有」や「授業参観の際の視点の設定」など、校内での授業参観の取組を工夫している。

② 学力向上推進協議会

高知県内の大学教授や県産業振興部の地域支援企画員、地域の中学校長や市教育委員会教育次長に委員を委嘱し、学力向上推進協議会を２回開催した。協議の中で、委員からは次のような助言が得られた。

（ａ）第１回学力向上推進協議会（８月２６日（水））

・自己肯定感というキーワードは、非常に重要な視点である。この自己肯定感は、「～ができる」というように、生徒にできることが増えていくことでも高まっていくと考えられる。

・各取組において、生徒の意欲や関心がどのように高まったのかをどのように見ていくのかについて、どのアウトカムを見ていくかを明確にしなければ、評価が難しい。

・「総合的な学習の時間」や「産業社会と人間」の年間指導計画を見ると、何をやるかというコンテンツは書かれているが、その活動を通して何ができるようになればよいのかについては、具体的に示されていない。
・生徒のコミュニケーション能力を高めることは大変重要なことである。例えば、出身地域ごとに生徒がそれぞれの地域のことを話し合うといった活動があってもいいのではないか。
・スマートフォンなどの情報端末の使用時間が長いという話があったが、それならば、情報端末を利用しての学習はできないかといった、「発想を変える」という視点も重要である。ＩＣＴやアプリを活用した学習方法についても取り入れてみてはどうか。
・これまでの英語・数学の取組を他の教科全体に広げていくことや、目標の焦点化・整理が大切である。

（ｂ）第２回学力向上推進協議会（１２月１７日（木））
・他者に学習内容を教えるという活動を行った生徒が、一番学習内容の定着の度合いが高いということが示されている。数学で取り組んでいる「教え合い学習」は大きな効果がある。
・生徒の学力を上げるためには、教員の指導力の向上、資質の向上が不可欠である。その際、校内研修やお互いに授業を見せ合う取組は大変重要となる。他教科の教員からの異なった視点での質問や発想は、大変参考になり、また大きな刺激となる。
・グループ学習については、教員側が「何のためのグループワークなのか」を意識して行うことが重要である。集まって話をしていればグループワークかと言えば、そうではない。
・グループワークを通して、「どこが分からないのか」を生徒自身が実感することも重要である。また、教員側としては、グループワークを観察していく中で、通常の授業では確認しづらい生徒のつまずきが見えてくる。
・地域を題材とした体験的活動について、「面白い」と思う生徒もいれば、「そうでもない」と思う生徒がいるのが、「地域を学ぶ」ということの面白さである。これは、同じものを違う観点から見ているために起こってくる。生徒の異なった意見を教員がファシリテートしながらコミュニケーションさせることが重要である。
・外部から講師を招いて授業を行う場合は、事前学習・事後学習をいかにうまく行うかが要となる。特に、外部講師による授業が終わった後の事後指導における「振り返りの濃さ」は重要で、そのために何に焦点を当てて振り返りをさせるかを教員が意図的に仕掛ける必要がある。

③　視学官による学校訪問

１２月１４日に訪問いただいた長尾視学官からは、推進校の取組に対して次のような助言を得た。
・教科指導はもとより、生活指導・生徒指導にも共通することであるが、最も大切なことは、教室内に「学ぶ環境（雰囲気）」を作ることである。
・自己肯定感を高め、生徒たちが自信をもって生きていくことができるよう教育を行うことが重要である。その際、自己肯定感を高めるためのポイントは、「生徒を受け入れること」、「学校の中で自分が必要とされていることを生徒自身に感じさせること」、「生徒に達成感を感じさせること」の三つである。
・社会で何かをやり遂げる人は、必ず「粘り強くやり抜く力」をもっている。
・主体的・協働的な学びは、生徒に合ったやり方で行えばよい。特定の方法にこだわる必要はない。
・生徒たちが楽しそうにやっていない取組については、「課題の設定が生徒のニーズに合ったものになっているか」という観点などから、授業内容を振り返ることが大切である。

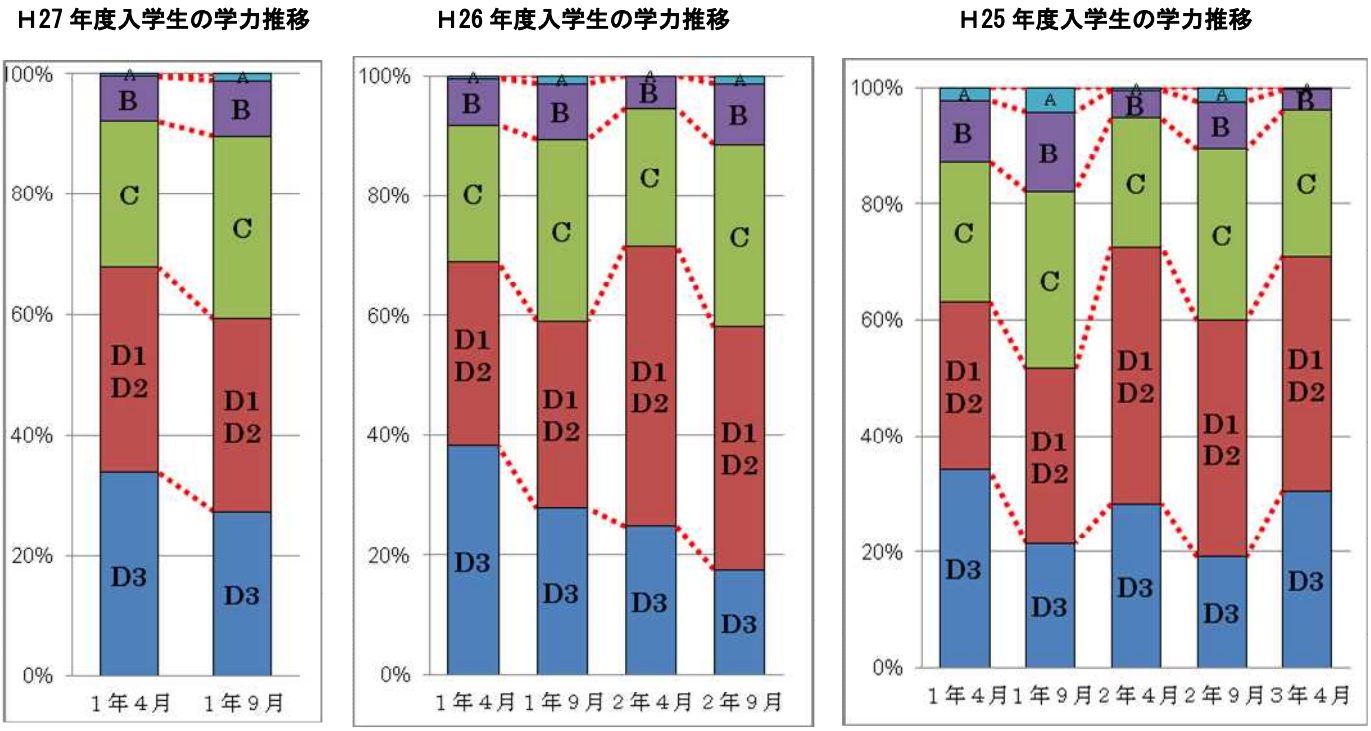
４　研究成果等の把握と検証

（１）推進地域の成果等

推進地域においては、学力定着把握検査の結果分析やそれに基づく取組から、次のような成果及び課題が明らかとなった。

①　平成２７年度の学力定着把握検査の結果

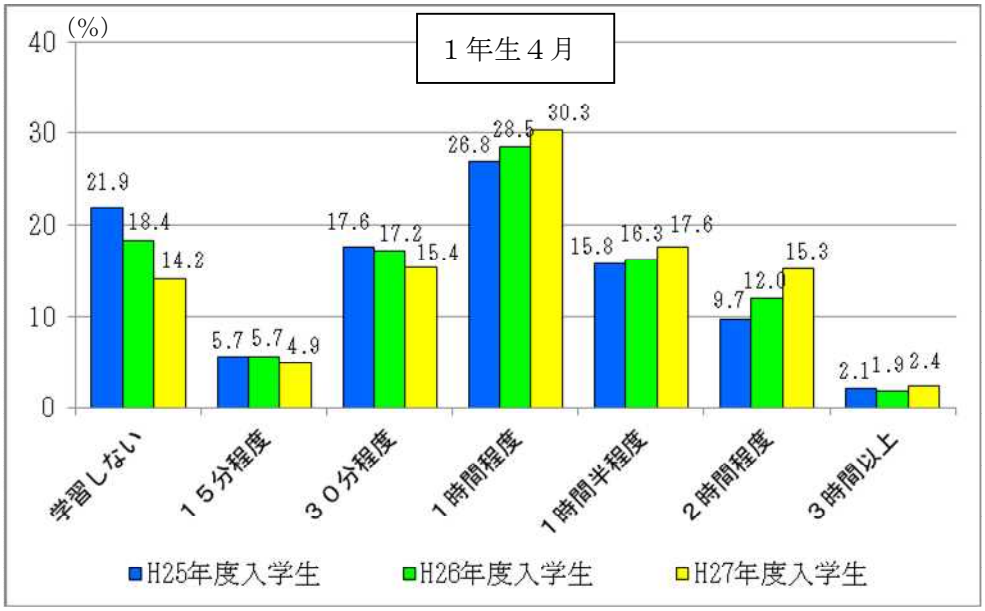
図表３　平成２７年度在学生の学力の推移（Ｈ２５～２７年度入学生）



※　学力定着把握検査のうち、基礎力診断テスト受検者（３０校）の国数英の３教科総合による各学力層の割合

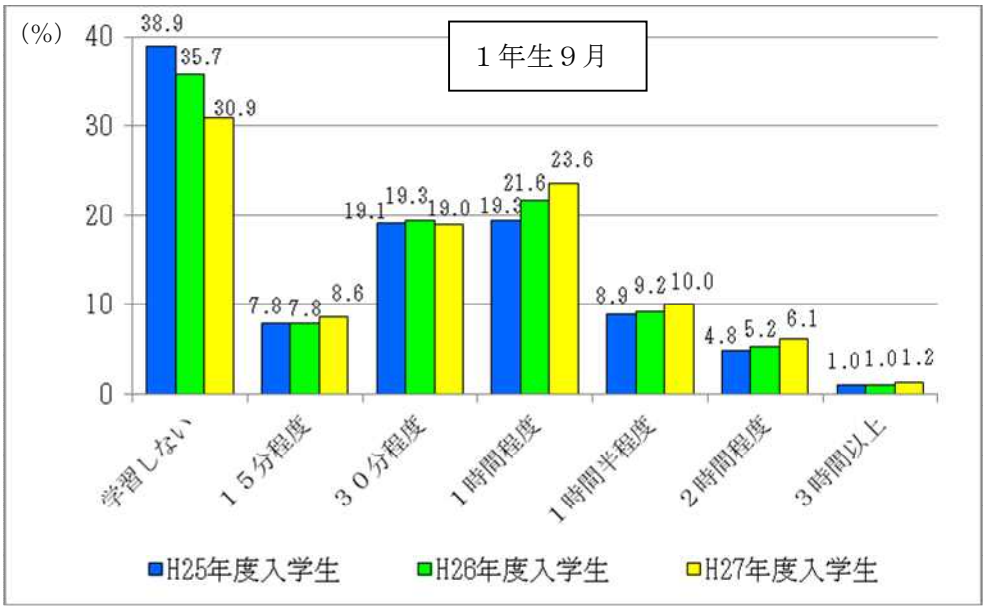
※　Ａ：国立大学合格レベル
　　Ｂ：公立大学一般入試合格レベル、国公立大学推薦入試合格可能レベル、私立大学一般入試で選択肢が広がるレベル
　　Ｃ：私立・短期大学・専門学校の一般入試に対応可能なレベル
　　Ｄ：上級学校に進学可能だが授業についていけず苦労するレベル（うち、Ｄ３は義務教育内容が未定着なレベル）

図表４　平日の１日の平均学習時間（４月検査結果）



※　学力定着把握検査のうち、基礎力診断テスト受検者（３０校）の結果

図表５　平日の１日の平均学習時間（９月検査結果）



※　学力定着把握検査のうち、基礎力診断テスト受検者（３０校）の結果

平成２７年度の学力定着把握検査の概要から分かることは、以下のとおりである。

（ａ）学力状況

平成２５年度入学生については、３年４月の検査において、再び学力が下降する傾向がみられ、確実な学力の定着・向上に課題が残った。しかしながら、平成２６年度入学生については、義務教育内容が未定着の学力レベルを示すＤ３層に注目すると、例年の学年進級時に再び学力が下降する傾向がみられず、その結果として、高校入学時と比較して２年９月の検査結果ではその割合は半減している。県全体として「義務教育段階の基礎学力が未定着の生徒」に注目し、その生徒たちの実態に応じた指導の工夫が各校において行われたことが、一定の成果に結びついていると考えられる。

一方、Ａ～Ｃ層の生徒の割合に注目してみると、その割合はこれまでと比較しても大きな変化がみられないことから、次年度以降については、「学力の多層化」を一層意識した、各層に対する指導の在り方についても研究を進めていく必要がある。

（ｂ）家庭学習の状況

平成２７年度の検査結果からも、高校入学直後と比較して家庭学習をほとんどしない生徒の割合が増加する傾向は、多くの学校に共通する課題となっている。しかしながら、入学年度別に見てみると、現３年生よりも現２年生、現２年生よりも現１年生の方が、入学時点での家庭学習をほとんどしない生徒の割合も減少してきており、９月時点での割合についても、同様の改善がみられる。これは、高等学校入学者選抜の日程が２月から３月に変更になったことや、各校において、学習習慣の定着に向けた取組が意識されてきている結果によるものと考えられる。

また、推進校である室戸高等学校を含む複数の学校においては、自主学習ノートの取組、日々のスケジュールや授業の振り返りなどをまとめるキャリアノートの取組、学習環境を整備する取組などの結果、４月と９月の調査を比較しても、家庭学習時間の減少がみられない、もしくは、学年進級とともに家庭学習時間が増加する結果も出ている。特に、複数の学校で行われている自主学習ノートの取組は、学習習慣の定着という点では、一定の成果があらわれている。

② 各校の取組の工夫

学力定着把握検査の結果等を踏まえたうえで、生徒の学力向上に関する重点目標を設定し、具体的な取組を整理・検証する「学力向上プラン」を活用することで、各校でのＰＤＣＡサイクルを意識した組織的な学習指導体制の構築も進み、各校において生徒の実態に応じた以下のような様々な取組が、成果をあげつつある。

学習習慣の定着	・学習ノートの取組（内容は自由、教科による課題設定） ・学習記録をつけさせる（学習時間の継続調査と活用） ・学習支援員の活用（ＴＴによる初期指導の徹底）
学習意欲の向上	・学習支援員による放課後補習の充実（補習と授業のリンク） ・キャリアノートの活用（教員とのコミュニケーション） ・教科別面談の実施（個に応じた学習方法の指導）
目的意識の明確化	・ＣＡＮ－ＤＯリストの作成（目指すべき姿の提示） ・「学びのアクションプラン」の作成（生徒がＰＤＣＡを意識する）
授業改善	・ユニバーサルデザインの授業づくり ・授業参観の工夫（参観の視点・改善のポイントの共有） ・生徒が主体的・協働的に学ぶ機会の設定（教え合い学習等）
組織化	・学力向上委員会の有効活用（教員がＰＤＣＡを意識する） ・教科会・学年会の活用（生徒の現状把握及び取組の検証） ・教材の電子化・共有化（教員の多忙感軽減）

また、県教育委員会の指導主事・管理主事による年間２回の学校訪問での協議等において、これらの取組の詳細を聞き取り、他の学校を訪問した際や、担当者を集めた研究協議会において、その内容をフィードバックする仕組みも整ってきた。

しかしながら、依然として、生徒の現状として、学習習慣や義務教育段階の学習内容の未定着、学習意欲や目的意識の低さが課題である。また、学校体制としても、生徒の学力の多層化への対応等がまだ十分とはいえない。さらに、「アクティブ・ラーニング」という言葉の浸透とともに意識が高まった「習得・活用・探究」という学習プロセスや、主体的・協働的な学びを意識した授業改善についても、県全体として今後一層進めていく必要がある。

（２）推進校の成果等

推進校においては、学校訪問及び学力向上推進協議会において取組の検証を行い、次のような確認・評価を行った。

① 基礎学力の定着と学力向上のための授業実践

・数学では、主体的・協働的に学ぶ学習について、これまでの「教え合いタイム」に加えて、知識構成型ジグソー法を導入することで、生徒の学習意欲や理解力の向上に効果が上がっている。

・教員同士が互いに授業を評価し、授業改善に取り組む体制が整ってきた。また、授業観察シートの工夫・活用により、授業者への授業評価や感想・意見のフィードバックを授業改善につなげる仕組みも出来上がっている。

・自学自習ノート（ドリカム帳）の活用については、一定の家庭学習時間確保には成果があったが、生徒が各自で行う学習内容の質を高める指導の工夫が、今後の検討課題である。

② 学習意欲を高めるための地域を題材とする体験的教育プログラムの開発

・学校設定科目「ジオパーク学」を、これまでの選択科目から系列の必修科目としたことで、履修する生徒数が増加した。

・取組を進めることにより、学習の姿勢が前向きに変わった生徒もみられ、今後、プログラムや指導方法の工夫について、さらなる検討が必要である。
・平成２７年度より、「産業社会と人間」の一部として地域のことを知る「室戸学」を導入したことにより、生徒たちは室戸について改めて認識を深め、さらに理解するきっかけとなった。

５　推進地域における研究成果等の活用

研究成果等については、次の方法により、県内の高等学校に普及を図った。

（１）推進地域の研究成果等の活用

県教育委員会が実施した学力定着把握検査の状況や各校の取組、高知県オリジナルアンケートに基づく分析の成果等については、県教育委員会が主催する学力向上サポート事業研究協議会（７月・２月）及び県教育委員会の学校訪問（６月・１１月）の場において、周知・普及を図った。

しかしながら、県全体の学力の状況等を見ると、依然として、

〇義務教育段階の学力が十分に身に付いていない生徒が一定割合存在する
〇生活習慣・学習習慣が定着していない生徒が少なくない
〇学習意欲に乏しく、目的意識が希薄な生徒が一定割合存在する
〇学力の多層化に対する学校の組織的な対応が十分ではない

などの課題も残されており、今後も引き続き多くの施策を活用しながら、各校での学力向上に向けた取組を支援していく必要がある。また、年間２回の研究協議会や学校訪問の内容についても見直しを行い、学校のニーズに合った研究協議会や学校訪問となるよう、さらなるブラッシュアップを行っていく必要がある。

（２）推進校の研究成果等の活用

推進校における研究成果等についても、学力向上サポート事業研究協議会及び学校訪問において、「学習習慣の定着の工夫」として自主学習ノート（ドリカム帳）の取組、「授業改善の工夫」として数学の「教え合いタイム」、授業参観における授業参観シートの活用の取組等を他の高等学校に紹介し、その普及を図った。

また、これまでの研究成果を報告書にまとめ、県内の高等学校等に配布する予定である。

（様式７）

平成２７年度「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」委託業務報告書【推進校（学校）】

番号	３９	都道府県市名	高知県

１　学校の概要

＜生徒数・学級数（平成２７年４月現在）＞

学校名	高知県立室戸高等学校（こうちけんりつむろとこうとうがっこう）				
学　年	１年	２年	３年	計	教員数
学級数	３	３	３	９	32
生徒数	63	50	40	153	
	学校のホームページアドレス		http://www.kochinet.ed.jp/muroto-h/		

本校は高知県の東部に位置し、昭和２１年に高知県立室戸中学校同高等女学校として創立され、昭和２３年室戸高等学校として設立された。かつては、分校が室戸市内に２校、隣接する東洋町に１校設置され、室戸地域の高校教育を担ってきた。しかし、生徒減少期を迎え、昭和５７年には、室戸市内の２つの分校は閉校になり、平成９年には普通科から総合学科へと学科改編を行った。平成１１年には東洋町の分校が閉校となり、室戸地区唯一の高等学校として現在に至っている。平成２８年には創立７０周年を迎え、今後の室戸高校の在り方について考える節目ともなっている。

室戸は、遠洋マグロ漁船の基地として栄えた町であり、第一次産業の漁業が中心であったが、現在は室戸世界ジオパークをメインとする観光業や商業が中心となり、漁具の製造や魚の冷凍技術から発展した工業もある。地域社会の産業構造が大きく変化する中で、将来の室戸地域の担い手として、地域社会で貢献・活躍できる生徒を育成することも本校に課された使命である。

一方、地域の少子高齢化は、急激な人口減に繋がっており、本校の生徒数にも大きな影響を与えている。現在は、１０年前の１/３となり、多彩な選択科目を特色とする総合学科体制を維持することが非常に難しい状況になっている。

２　推進校における学力に関する現状

本校は室戸市の唯一の高等学校である。生徒は三方を海に囲まれた広範囲の地域から通学してくる。市内には鉄道がなく、他の市町村にある高等学校に通学する場合は交通手段がバスしかない。このような地域性に配慮して、県立高校として地域の多様な生徒をできる限り受け入れるようにしている。そのため、義務教育段階の学力定着に課題を抱えたまま入学して来た生徒も一定数含んだ状況で、総合学科として２年次より４つの系列（平成２５年度入学生までは５系列）を選択させている。それぞれの系列では専門的な教科・科目も学習するが、１年次にしっかりとした基礎学力を身に付けることや学習習慣を確立することが、将来の進路設計のためにも強く求められている。

本校の生徒の学力の状況は、県が「学力向上サポート事業」の一環として実施している学力定着把握検査の結果から確認することができる。平成２４～２７年度までの１年次生入学時の検査結果は、次のとおりである。

		国語（%）	数学（%）	英語（%）	３教科（%）
義務教育段階の学力定着に課題のある生徒（進学・就職できない可能性が大きい生徒）	２４年度	０人（0.0）	15 人(23.1)	13 人(47.6)	21 人(20.0)
	２５年度	８人(19.0)	17 人(40.5)	20 人(47.6)	28 人(66.7)
	２６年度	２人（3.8）	９人(17.3)	９人(17.3)	21 人(40.4)
	２７年度	９人(14.3)	５人(7.9)	12 人(19.0)	17 人(27.0)

＊「基礎力診断テスト(ベネッセ)」の学習到達ゾーンのＤ３層に位置している生徒数と割合

この検査結果から、平成２７年度には、３教科全体で義務教育段階の学力定着に課題がある生徒が３割弱存在することがわかる。平成２５年度入学生は、この割合が６６．７％であり、近年の中でも最も厳しい状況にあった。また、教科別にみると、年により変動はあるが、数学と英語で多くの生徒が義務教育段階の学力定着に課題を抱えていることも分かる。さらに、学習意欲や学習に対する意識が希薄な生徒も少なくない。このような状況を克服するため、本校では本調査研究課題を以下のように設定した。

３　研究課題

本校における生徒の学力に関する現状を踏まえ、課題解決のために取り組む研究課題を以下の２点とした。

（１）基礎学力の定着と学力向上のための授業実践

入学当初の指導がいかに重要であるかは、入学生徒の状況から明らかである。特に特定の教科での取り組みが生徒の学力を進展させる原動力になり、その他の教科への広がりにもつながる。そうしたことを踏まえ、昨年度から継続して、１年次生の基礎学力の定着と学力向上の授業実践に取り組んだ。特に義務教育段階の学力定着に課題のある数学と英語に焦点をあて、授業において主に学力定着に課題のある生徒たちを主体的に学習活動に参加させる指導内容・方法の改善に取り組んだ。また、生徒の主体的な学習態度の育成のために、教科担当だけでなく、ホーム担任や学年団、さらに学校全体での取り組みとすることを目指した。

（２）学習意欲を高めるための地域を題材とする体験的学習プログラムの開発

生まれ育った地域の自然や歴史、文化や伝統を学ぶことは、郷土に対する自信と誇りにつながり、自己肯定感を高めることにもつながる。このことから、将来への明確な目標の設定や、日々の学校生活の充実、学習意欲の向上を目指し、１年次の「産業社会と人間」の授業に新たに「室戸学」を導入した。さらに、学校設定科目「ジオパーク学」（今年度は２年次のみ）の指導内容・指導方法の充実・改善に取り組んだ。

４　平成２７年度の重点課題

（１）基礎学力の定着と学力向上のための授業実践

・主に１年次生の数学と英語の基礎学力の定着と学力向上を目指し、生徒の学力の実態と結果分析を生かした指導内容・方法の改善に取り組んだ。特に、授業改善については、大学教員等からの助言も受けながら、課題の発見・解決に向けて生徒が主体的・協働的に学ぶ学習の工夫・改善を行った。

・家庭学習習慣を定着させる指導を充実させるために、課題・小テストの効果的な実施方法や家庭学習ノート（ドリカム帳）・キャリアノート（室高手帳）の有効な活用方法の研究について、学年団を中心に組織的に取り組んだ。

・基礎学力の定着と学力向上のための指導内容・方法の改善を、数学科・英語科から他教科へも拡大させるために、校内での情報共有の体制づくりに取り組んだ。

（２）学習意欲を高めるための地域を題材とする体験的学習プログラムの開発

・２年次生のＩＴ・アート系列の生徒全員が履修する「ジオパーク学」の指導の充実に向けて、生徒が主体的・協働的に学ぶ学習を取り入れた授業改善に取り組んだ。

・１年次生の「産業社会と人間」に「室戸学」を導入し、入学時から地域についての知識や理解を深め、室戸の良さや課題について主体的・協働的に学ぶことができるプログラムを開発した。

５　研究の具体的内容

（１）基礎学力の定着と学力向上のための授業実践

①主に１年次生の数学と英語の指導内容・方法の改善

県教育委員会が実施する「学力定着把握検査」の分析により、本校生徒の学力の状況を確認・分析しつつ、指導方針・内容を検討しながら効果的な授業を展開できるように徹底した。また、市内の中学校の数学科・英語科の教員を招き、本校生徒の学力や各中学校で取り組んでいる指導内容・方法などにつ

いて情報交換等を行う研修会を開催し、その後の授業実践に生かした。また、中学校においては、本校教育活動を意識した、将来につながる指導方法への改善の契機としてもらった。

大学教員、県教育委員会指導主事等の指導・助言を得ながら、課題の発見と解決に向けて生徒が主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆるアクティブ・ラーニング）を取り入れた授業改善に取り組んだ。

・数学科では、昨年に引き続いて、「コーネル式ノート」の活用やグループ学習（「教え合いタイム等」）の一層の工夫・改善を図ることで、学習意欲の向上や基礎学力の定着に取り組み、主体的な学習態度を育てた。

・英語科では、義務教育段階の基礎的な語彙や文法を定着させるために、スモールステップでの反復学習を行うとともに、習得した知識を活用して自分の考えや意見を表現する活動を取り入れた授業の工夫・改善に取り組むことで、基礎学力の定着及び主体的な学習態度の育成を図った。

②家庭学習習慣の定着を図るための指導の充実

〇家庭学習ノート（ドリカム帳）

生徒の興味関心に応じて、１日１ページを基本として自主的な学習を行う家庭学習ノート（ドリカム帳）の取り組みを行った。取り組みが不十分な生徒に対しては、金曜日の放課後に、学年団の担当者が指導した。その結果、２学期以降、課題が残る生徒は１０名程度から２～３名程度に減少している。なお、３学期からは家庭学習の質の向上も意識し、週毎に教科を指定し、取り組ませている。

〇キャリアノート（室高手帳）

生徒と教員のコミュニケーションを図りながら、生徒のキャリアプランニング能力を育成することを目的として、日々の生活記録や学習記録などをまとめるキャリアノート（室高手帳）の取り組みを開始した。

③授業改善の組織的な推進

〇特定の教科での取り組みを学校全体で理解・共有するための工夫

・校内研修を実施し、数学科・英語科での取り組みを学校全体で共有・理解するとともに、その他の教科においても、言語活動の充実または協働的な学びを意識した授業を行うなど、教職員間で目指す授業の共有を図った。

・各教員の授業の質を一層高めるために、教員が相互に授業を評価し、感想や意見を授業者にフィードバックするツールとして授業観察シートを工夫・活用することで、授業改善につなげる体制を整えた。

〇先進校視察等

１月には、埼玉県への学校視察や、同県で開催された『未来を拓く「学び」プロジェクトシンポジウム』への参加を通じて、基礎学力の定着や学習習慣の確立に向けたインターネットツールの活用、英語の授業におけるＩＣＴの活用、基礎学力の定着及び言語活動の活性化、知識構成型ジグソー法による具体的な授業実践について、情報を収集した。また、これらで得られた知見は、校内研修として視察者が発表を行い、学校全体で共有した。

（２）学習意欲を高めるための地域を題材とする体験的学習プログラムの開発

①学校設定科目「ジオパーク学」（２年次）の充実

今年度より、２年次生のＩＴアート系列全員が履修することになり、全体的に学習計画の見直しを図った。昨年度までの反省を踏まえ、ジオツアーの実施といった最終ゴールにとらわれず、まず「生徒たちが興味・関心のあること」と「ジオパークの活動」を結びつけることを学習の主軸とし、調べ学習や観光プランの作成、発表及び相互評価をグループ単位で行う等、課題の発見と解決に向けて、生徒が主体的・協働的に学ぶ学習形態を取り入れた。

また、生徒たちがジオパークについての基礎的な知識を増やしていく過程で、地元関係者から話を聴いたり、体験活動の中から学び取ったことを自分の言葉で伝えたりする機会を増やすよう、学習形態の

充実を図ったりして、地域とのつながりや、地域貢献の在り方について考える機会を増やした。

②「産業社会と人間」（１年次）に「室戸学」を導入

これまでも、ジオパークなどの地域理解に対する授業の充実が求められていたため、今年度より、１年次の「産業社会と人間」の中に「室戸学」を導入した。目的は、入学時から、地元の良さや課題について学ぶことによって、高校での学習と社会との関連に気付かせ、生徒の学習意欲の向上や主体的な学習態度の育成に取り組むとともに、社会人としての資質・態度を涵養することである。具体的には、地元の振興に取り組んでいる人たちを外部講師として多く招へいし、生徒に「地域を知ること」「身近な人に学ぶこと」で刺激を与え、将来の目標に結び付けさせることに取り組んだ。また、地域における自分の存在を意識させ、将来的に地域振興に向けたアイデアについて協議できるようになるための土台づくりを行い、２年次の「ジオパーク学」や３年次の「課題研究」（総合的な学習の時間）につなげていくものとした。なお、生徒が主体的・協働的に学ぶことができるように校外学習や、グループ活動を通して学習の振り返りを発表する言語活動を取り入れた。

６　研究の成果

取り組み全体の研究成果等の把握と検証については、年２回開催する学力向上推進委員会での協議を通じて、各取り組みの進捗状況の確認や成果・課題の整理を行った。

（１）基礎学力の定着と学力向上のための授業実践

①数学における教育実践

〇コーネル式ノートの活用

昨年度に引き続き、コーネル式ノートを活用し、メモを取る訓練、自分の言葉でまとめる訓練を実施した。１学期は主に、「Cue」にメモを取りながら授業を受けることに慣れさせ、小単元毎に自分の言葉と表現で「まとめ」を作成させた。さらに、２学期には、毎日の宿題として、１時間毎の「まとめ」を作成させた。また、その「まとめ」のチェックを授業開始時に生徒同士で行わせることで、簡易的に前時の復習を行い、良い表現や内容を書き足すことを促した。

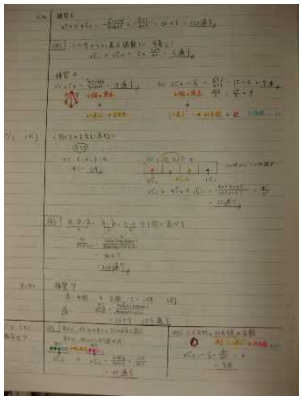


写真1　生徒のコーネル式ノート

〇自由な教え合いから協調学習への転換

本年度は、知識構成型ジグソー法による授業展開に向けて、１学期は「教え合いの習慣化」、２学期前半は「グループワークによる課題解決学習」を意識的に実施し、段階的に仕掛けを講じてきた。

「教え合いの習慣化」としては、練習問題を行う際に、次の２点を徹底的に指導した。

・答え合わせは先に生徒同士で行い、答えが一致しない場合は協議する。

・早く終われば、終わっていない生徒に教えに行く。

これらを行うために、授業中の離席を許可し、全員が解答を終えてから板書による説明を行った。４月当初はぎこちない様子であったが、回を追うごとに習慣として身に付いてきた。１学期中間試験終了後、「教え合いをすることにより、理解が深まっていますか？」という問いに対して、約９割（１６名／１８名）の生徒が深まっていると回答し、「小単元のまとめが定期試験に効果があったか？」という問いに対して約９割（１７名／１８名）の生徒が「効果があった」と回答した。

２学期中ほどからは、知識構成型ジグソー法による授業展開を行うにあたり、その前段階として「グループ学習」を行った。定期試験の得点上位の生徒をリーダーに設定した班構成を行い、定期試験（三角比）の振り返りや、教科書の応用問題より難易度の高い問題（三角比）への挑戦を実施した。

定期試験（三角比）の振り返りでは、リーダーが中心となり、間違った箇所を直していく作業を行った。また、より難易度の高い問題（三角比）への挑戦については、全員に負荷が掛かる状況にするために、「リーダーは問題を解くことができない。教科書やノートを用いて班員を誘導し、解答までた

どりつくこと。」という条件をつけて問題に取り組ませ、最後に班員による発表の場を設けた。１学期から教え合うことが習慣となっていることもあり、活発な意見交換が見られた。

授業後にアンケートを取った結果、「理解が深まった」と回答した生徒は９５％（１７名／１８名）であった。また、定期試験と同一問題を小テスト（基本的な公式利用を問う問題を５問）で行った結果、無回答や公式の選択ミスといった誤答は減少（約４４％→約１４％）し、正答率は微増（約４５％→約５２％）し、立式段階までは正解しており、部分点といったケースは増加（約５５％→８５％）した。

○知識構成型ジグソー法の取り組み

【第１回：「円に内接する四角形の面積（東亜大学）」（三角比の応用問題）】

まず初めに、全員に対する共通課題（導入）として、四角形において、４つの辺の長さと１つの角が分かっている場合、求めることの出来る長さを考えることで、対角線に気付かせる問題を行った。

次に、以下の３つのエキスパート活動を行った。

＜エキスパートＡ＞

「$\cos(180^\circ - \theta) = \cos\theta$、$4\cos\theta - 2 = 0$ を解く」

＜エキスパートＢ＞

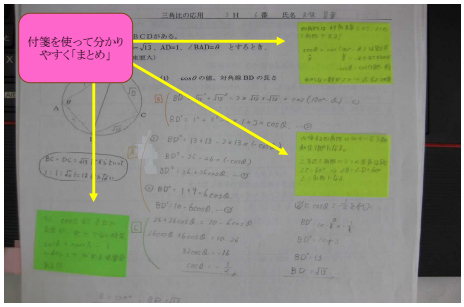
「対角線の長さを２つの三角形から余弦定理を用いて求める」

＜エキスパートＣ＞

「連立方程式を解く」

写真2　ジグソー法を用いた授業展開－1

実際に取り組んだ結果、活発に意見交換はあるものの、上手く手がかりを見出せず、進まない班もあれば、途中段階で手が止まっている班もあった。順調に問題内容を把握し、立式をするが、計算段階でのミスが多く、なかなか解答に辿り着かない班もあった。その中で、６班中１班が解答まで辿り着き、生徒による板書と発表、教員による振り返りを行った。教員による振り返りの際には、メモを取りながら聞く姿勢も見られた。その後の「まとめ」について、個々に分かりやすい表現を工夫（箇条書き、ポイント書き込み、付箋の活用など）しており、充実したものが作成された。



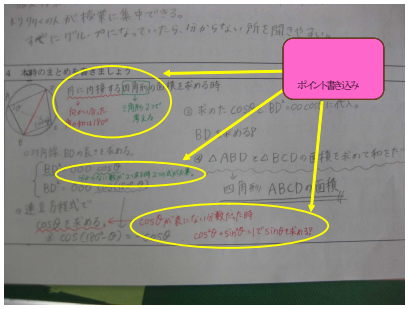


写真３　生徒自身による自分の言葉でのまとめ

授業後の生徒のアンケートでは、次のような感想が寄せられた。

・それぞれの解き方を組み合わせて解く為には、３人全員の理解が必要であり、ひとつひとつのステップを踏んで解くことにより、１人ひとりが問題をしっかりと理解することができた。さらにそれを言葉にして説明することによって、より理解が深まる。

・（様々な側面から）考え合ったので、初見の問題が出ても、「ひらめき」が出てくると思う。発想が豊かになる。

・班員全員が同じスピードでやることによって、自分の理解していなかったところを共有できてすごく良かった。色々な意見の中から正しいものを探すのが楽しかった。

後日、センター試験２０１５年の三角比に関する問題を実施したところ、約８割（１５名／１８名）の生徒が半分（基本公式に関する問題）まで正解し、完全解答に至った生徒が約１割（３名／１８名）であった。

【第２回：「最短経路（数学検定２級２次（改）」（場合の数の応用問題）】

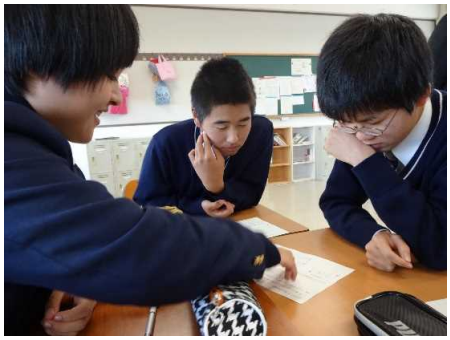


写真４　ジグソー法による授業展開－２

まず初めに、共通課題（導入）として、最短経路の捉え方と右矢印と上矢印の並べ替えによって最短経路を決定することに気付かせた。

次に、以下の３つのエキスパート活動を行った。

＜エキスパートＡ＞「積の法則」

＜エキスパートＢ＞「同じものを含む順列、最短経路の求め方」

＜エキスパートＣ＞「補集合の要素の個数、最短経路で特定の部分を通る考え方」

２回目のジグソー法による授業展開であったため、次に何をしてよいか分からないといった生徒はおらず、活発に意見交換を行うことができた。その中で、特に印象的な場面に出会った。意見交換の最中、３人班の２人の生徒が気付いた事を話し合っていたとき、突然１人の生徒がひらめいた様子で、興奮気味に説明を始めた。聞いていた生徒もその内容がすぐに把握でき、解への道筋が見えた瞬間ハイタッチをしながら笑顔をこぼした。すかさず、もう１人の生徒に「ねぇ分かった？」と気遣いを見せ、首を横に振った生徒に対して、丁寧に説明を行っていた。解く過程を楽しみ、理解したことを他者に教えることにより、学習内容の定着が進むといった一連の流れがみられた。

写真５　ジグソー法の活動後に行われる板書と発表

また、１回目の反省を活かし、早く進んでいる班に対して、途中段階までの板書を適宜指示することも行った。さらに、板書や発表準備の際に、手持無沙汰になっている生徒に声を掛け、参観者に自分の解いた内容を説明させるといった手立ても行った。授業後、参観者からは「十分に内容が伝わった」「分かりやすい説明であった」とのコメントを頂いた。

本時の内容は４題（問１～問４）で構成されており、授業内では問１～問３までの内容について生徒による板書、発表、教員による解説を行った。最後の問４については次時に行うことを告げ、授業は終わった。ところが、休み時間になっても、半数程度の生徒は自主的に問４を解こうと席を離れず挑戦していた。こうした光景から、生徒たちの数学に対する興味・関心の高まりを強く感じた。１時間内に解き終えられる難易度の問題よりも、発表、解説を聞いた後、「あと少し考えれば解答に辿り着く」程度の問題の方が興味・関心を引き出せるのではないかと感じた。

○スモールステップによる教え合いの積み重ね

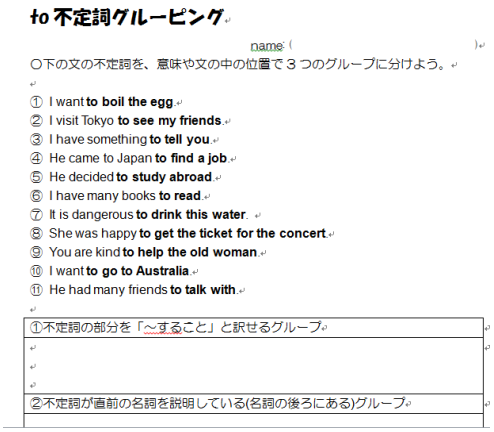
１学期から、「コーネル式ノートを活用したまとめの作成」「教え合いの習慣化」「グループ学習」というスモールステップを積み重ね、知識構成型ジグソー法による授業展開を通じて、思考力、判断力、表現力を向上させる学習を行ってきた。

３学期初め、担当ホームにおいて、「数学の授業は分りやすいですか？」という質問をしたが、１８名全員から肯定的な回答が得られた。この結果より、１学期から段階的に取り組んできた内容に加えて、知識構成型ジグソー法を取り入れた授業を行うことにより、生徒の興味・関心をさらに引き出し、自ら学ぶ姿勢を身に付け、授業に取り組む姿勢の育成に繋がったのではないかと考える。

②英語における教育実践

英語科では、１年次生の授業において、クラスごとの生徒の実態に応じた取り組み内容を設定した。本校の１年次生のクラスは、入学時点における生徒の希望進路に即して、就職希望者が多い２クラスと短大・四年制大学進学希望者が多い１クラスの計３クラスに分けて授業を行っている。

就職希望者の多いクラスの生徒は、中学校での学習内容が未定着な状況で入学してきた者が大半を占めていたため、基礎的な語彙力定着を軸とした、中学校での学習内容の復習に加えて、思考を促す活動を取り入れた授業を行った。



to 不定詞グルーピング

name:（　　）

○下の文の不定詞を、意味や文の中の位置で３つのグループに分けよう。

① I want **to boil the egg**.
② I visit Tokyo **to see my friends**.
③ I have something **to tell you**.
④ He came to Japan **to find a job**.
⑤ He decided **to study abroad**.
⑥ I have many books **to read**.
⑦ It is dangerous **to drink this water**.
⑧ She was happy **to get the ticket for the concert**.
⑨ You are kind **to help the old woman**.
⑩ I want **to go to Australia**.
⑪ He had many friends **to talk with**.

①不定詞の部分を「～すること」と訳せるグループ
②不定詞が直前の名詞を説明している(名詞の後ろにある)グループ

図表１　生徒の思考を促す活動

写真６　自分の考えをスピーチする生徒

その結果、９月の基礎力診断テストにおいて、４月当初１２名いた義務教育段階の学力定着に課題のある生徒（Ｄ３層）が４名に減少し、Ｄ１・２層が３１名から３６名、Ｃ層が１１名から１５名に増加した。英語表現の基礎となる文法知識の復習を繰り返し行ったことにより、生徒の基礎的な英文法の知識獲得につながったと考えられる。今後は、知識獲得とあわせ、自分の考えなどの表現のために「英語使用」をさせる指導にも一層重点を置いていきたい。

また、進学希望者の多いクラスにおいては、比較的基礎学力が定着している生徒が多いなかに、少数ながら中学校での学習内容が未定着な者がいるため、入学後１か月程度は中学校既習事項の復習を行い、その後高等学校の学習内容に入った。各単元の最終ゴールに自分の考えや意見を表現する活動を据え、各単元の内容に応じて言語活動を設定した。そうすることで、生徒が英語を使って表現する機会を確保することができた。

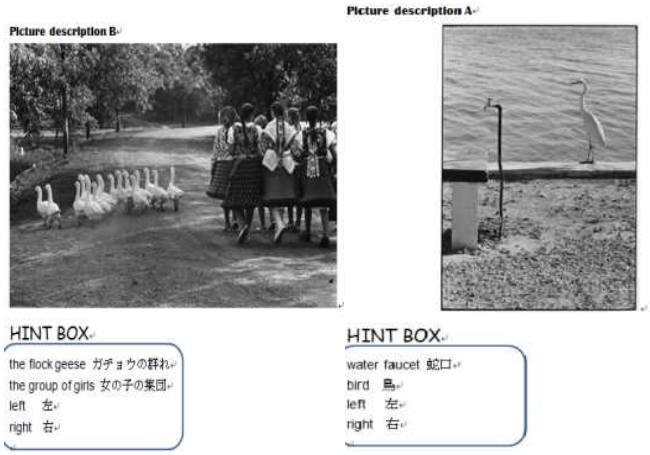


写真７　ペア学習で使用した教材

しかし、これらの授業内容は９月の基礎力診断テストの結果改善にはつながらなかった。原因としては、教員側が「明示的に」知識や学習内容を提示し、定着させようとした場面が少なかったことが考えられる。「知識獲得」よりも「英語使用」に焦点を当てた取り組みをしたため、英語使用の前にある言語材料の理解・定着（インプットやインテイク）のための指導が不十分であった。その結果、知識の定着を中心に問われる基礎力診断テスト等で直接の成果に結びつかなかったと推察される。

③家庭学習ノート（ドリカム帳）・キャリアノート（室高手帳）の取り組み

各取り組みの進捗状況は、学年団を中心に定期的に協議し、その運用の成果と課題について検証した。

	本校（%）		高知県全体（%）	
	１年生４月	１年生９月	１年生４月	１年生９月
ほとんど学習しない	14.5	6.3	14.2	30.9
１５分程度	0.0	7.9	4.9	8.6
３０分程度	17.8	15.9	15.4	19.0
１時間程度	30.6	38.1	30.3	23.6
１時間半程度	19.4	14.3	17.6	10.0
２時間程度	16.1	15.9	15.3	6.1
３時間以上	1.6	1.6	2.4	1.2

図表２　平日１日あたりの学習時間（授業を除く）の推移

本県の家庭学習の状況を見てみると、「ほとんど学習しない」生徒の割合が、４月から９月にかけて県全体で倍増しているのに対して、本校の生徒については、その割合が半減している。また、「１時間程度」家庭学習を行っている生徒の割合が、県全体では30.3%（４月）から23.6%（９月）に減少しているのに対して、本校の生徒は、30.6%（４月）から38.1%（９月）に増加している。「１時間半程度」「２時間程度」の生徒の減少幅が比較的小さいことも、県全体の割合と比較した本校の大きな特徴である。

この結果から、家庭学習ノート（ドリカム帳）の取り組みについては、家庭学習をある程度習慣づけることに繋げられたことが分かる。しかしながら、この取り組みが基礎学力向上へどの程度つながっているかについては、今後も検証が必要である。また、ノートを確認すると、学習内容が生徒によって大きく異なっていることが分かる。３学期からは、週毎に教科を指定するなどの工夫も行ったが、基礎学力の向上に向け、引き続き自主的・主体的な学習内容の「質」を意識して改善を図っていく必要がある。

また、今年度から始めたキャリアノート（室高手帳）については、自己管理能力の大切さや将来の進路を意識させることを目的として取り組みを進めたが、まだ十分な効果が確認できていない。一方、取り組みを進めるなかで、キャリアノートの実施や提出する意味を生徒に十分に理解させる必要性やチェックの方法など、改善に向けての課題もいくつか見えてきた。今後は、教員のキャリア・カウンセリングスキルの向上や、クラス担任と教科担当の連携の工夫などを通じて、取り組みをさらに充実させていかなければならない。

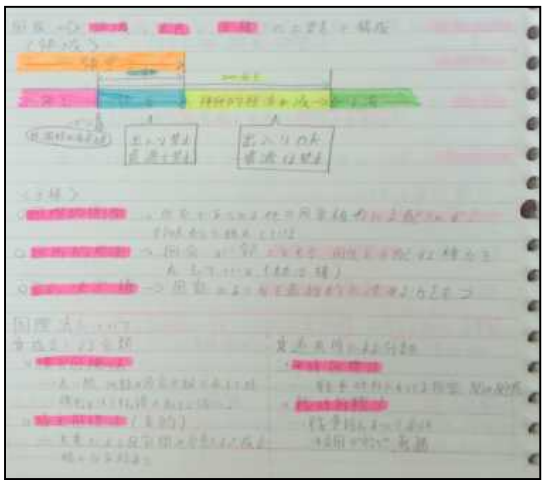


写真８　家庭学習ノート（ドリカム帳）

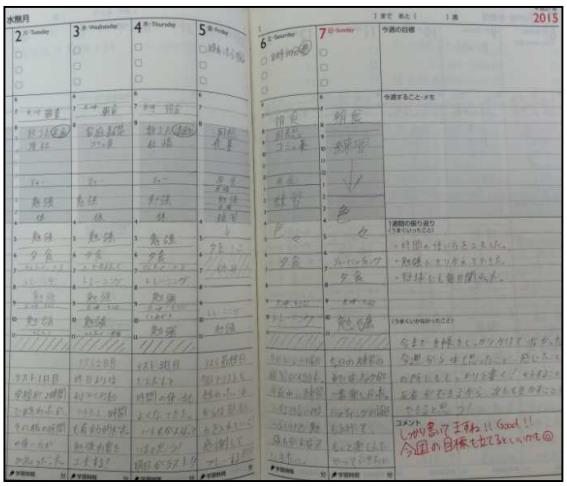


写真９　キャリアノート（室高手帳）

（２）学習意欲を高めるための地域を題材とする体験的学習プログラムの開発

学校設定科目「ジオパーク学」（２年次）の指導内容・方法の充実及び改善、「産業社会と人間」（１年次）において地元の良さや課題について学ぶ「室戸学」の教育プログラム開発は、下記のことに取り組んだ。

①平成２７年度「ジオパーク学」（２年次　２単位）の取り組み

＜年間学習スケジュール＞

日程	学習形態	学習テーマ	内容（〇留意点）	講師・協力者
４月	講義（校内）	ジオパークの活用について	ジオパークの意義や、今後の活用法について、ジオパークと自分との関わり方について多方面から考察する	ジオパーク推進協議会専門員
	校外学習１	ジオツアー体験	室戸世界ジオパークセンターの役割について学ぶ、室戸岬見学	ジオパーク推進課長 室戸岬観光ガイド
５～７月	調べ学習 グループ発表	①室戸の魅力を伝える（観光プランコンテストに向けて）	室戸ジオパークを満喫できる１泊２日のジオツーリズムを企画・立案 〇見せたい、知らせたい、伝えたい、体験してほしいポイントを整理する	ジオパーク推進協議会専門員
９・10月	ワークショップ（校内）	②室戸のマップづくり	地図上で１学期に作成したツアープランの検証 〇室戸地域の全体像を地理的にイメージする	ジオパーク推進協議会専門員
	※校外学習	室戸のいいとこさがし１	室戸岬方面（室戸スカイライン、道の駅）の調査、地元の方から聞き取り調査	
	※作業活動（校内）	室戸で五十音さがし！１	ジオパークに関する「かるた」の作成 〇アピールポイントを整理する	
	校外学習	③商店街を歩いてみよう（浮津商店街、室津港周辺、津照寺周辺調査活動）	観光プラン候補地で現地調査・聞き取り 〇班ごとに、気になった店や建物（室戸らしさが感じられる場所）を写真に撮り、なぜその被写体を選んだのか説明する	
	校外学習	④郷地区の歴史・文化・人々の暮らしに触れる	郷地区の歴史、神社の由来（室津八幡宮）について学び、精米体験（中山造園） 〇先人の知恵や、生産者の思いを知る	郷地区の方々
11月	※校外学習	室戸のいいとこさがし２	室戸世界ジオパークセンター再訪問 観光客から聞き取り調査	
	※作業活動（校内）	室戸で五十音さがし！２	ジオパークに関する「かるた」の作成 〇作品を発表する	
	校外学習	⑤土佐備長炭について	炭焼き窯見学、土佐備長炭について学ぶ 〇生産者の思いを知る	土佐備長炭窯元「炭遊」
12月	講義（校内）	⑥室戸の重要伝統的建造物群保存地区について ⑦室戸ジオパークの成り立ちと空海について	吉良川町の町並みの特徴と吉良川町の特産品について理解を深める 室戸ジオパークの特徴と、室戸に縁のある人物について理解する。 〇ジオパークと自分達との繋がりを実感する	
１・２月	※作業活動（校内）	⑧ジオパーク新聞をつくろう	１年間の学習の成果を新聞、あるいはパンフレットにまとめる	
	※作業活動発表（校内外）	⑨ジオツーリズムの具体的プラン作成・実践	これまでの学習成果を、自分達が考えたジオツーリズムのプランとして発表する	

○指導上の留意点・工夫

今年度より２年次生のＩＴアート系列全員（２１名）が履修するよう教育課程を変更したことにより、昨年度と比べて履修人数が多くなった。そのため、校外学習の際の交通手段（移動手段）の確保が課題となった。予算の関係上、バスの利用機会が限られているため、全員で一度に校外活動に出ることが難しく、校外学習班と校内学習班に分かれて活動できるように計画を立てた。（年間学習スケジュールの※を参照）また、遠方への移動が難しいことを逆手に取り、学校周辺の身近なフィールドを調査対象に組み入れ、生徒達がこれまで気付かなかったような地域の魅力を再発見することを新たな目標にかかげた。移動には主に自転車を使い、商店街の散策では地域住民と会話する様子がみられた。

写真 10　杵と臼による精米体験（室津八幡宮）

これまでのジオパーク学では、観光地等で活躍されている地元観光ガイドの方や、地域振興に取り組んでいる地元住民の方を講師に迎えての学習が中心だった。今年度は、講師を招へいしての講義自体は少なかったものの、地元産業の活性化や昔からの地域の伝統の保存に関わっている住民の方々との交流を進めることができた。

○実践の成果

１学期は、観光プランコンテストへの応募（予選に参加するための起案書作成）に向けて取り組んだ。（表中①）高校生自らがツアーを企画することで、自分達にできる地域貢献のあり方を考えてもらうことがねらいだったが、当初は、生徒達の地元に対する基礎知識や理解の不足もあり、何もかも手探り状態であった。現地調査が思うようにできず、インターネットや広報誌を使っての調べ学習（観光資源のあぶり出し）が中心となるなか、ツアープランのテーマ、コンセプトの決定（「誰が」「どこで」「何をするのか（できるのか）」）を明確にすることができた班もあれば、有名な観光スポットや商品を紹介するにとどまった班もあるなど、生徒達の学習意欲や取り組み状況に大きな差が出てしまった。しかし、一方では、各班で企画した観光プランをプレゼンテーションし、相互評価を行うなかで、生徒達の間で発表のために役割分担を行う姿や伝え方にこだわる姿勢が見られた。

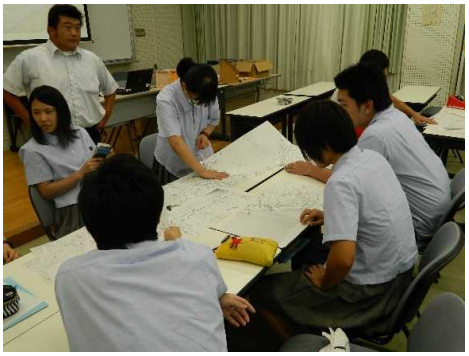


写真 11　室戸のマップ作り

２学期は、できるだけ生徒達の言語活動や、興味・関心が調査研究につながるように体験活動や作業を多く取り入れた。まず、「１日自由に過ごせる時間ができたら室戸で何をしたいか？」をテーマとして、室戸市の巨大マップ上に、おすすめスポットや、やりたいことを書いた付箋を貼っていくグループ作業を通し、今後の調査地域の確認を行った（表中②）。生徒が選択した場所は多方面にわたったが、時間の制約上、調査対象地域をしぼって、地元関係者と交流できる場面を設定し（表中③④⑤）、現地に赴けない場合はできるだけ映像や写真を多く見せて関心を持たせるようにした（表中⑥⑦）。

２学期の成果としては、生徒達が地元有識者から神社や祭りの由来について話を聴くことにより、伝統を継承していくことの大切さや地域の課題について認識を高めたことや、精米体験を通じて生産者の思いや苦労を知ることができたことがあげられる。また土佐備長炭の窯元を見学した際には、若手後継者の方から土佐備長炭の生産工程や現状についての話を聴いたことも生徒達に大きな刺激になった。振り返りの中でも、土佐備長炭の多様な活用法や今後の可能性について前向きな意見が出ていた。

現在、これまでの調査研究や学習の成果を活かし、実際に自分達の目や耳で感じたことを新聞・パンフレット（地元広報誌のようなもの）にまとめる作業を行っている。年度当初の目標の一つであったジ

オツーリズムプランの作成については、全員で実践とはならなかったが、希望した班が行うことになり、室戸岬周辺を対象地域として企画している。生徒達が作成している新聞やパンフレットは、生徒が企画したジオツーリズムを実施する際に参加者に披露する予定である。

②「産業社会と人間」（１年次　２単位）の中での「室戸学」の取り組み

今年度より「産業社会と人間」の授業の中で、合計７回、地域の良さや課題について学ぶ「室戸学」を実施した。

＜年間スケジュール＞

時期	内容	講師
4月 28 日（火）	室戸世界ジオパークについて （室戸地域の良さや魅力を知る）	室戸ジオパーク推進協議会
9月 15 日（火）	地域見学（２班） Ａ 室戸岬 Ｂ 吉良川町並み	見学先の専門員 Ａ 室戸世界ジオパークセンター Ｂ 吉良川町並み保存会
9月 29 日（火）	地域見学した内容の振り返り	見学先の専門員 Ａ 室戸ジオパーク推進協議会 Ｂ 吉良川町並み保存会
12 月１日（火）	室戸の地場産業について	土佐備長炭　窯元　炭玄
12 月 14 日（月）	クイズ作成による学習の振り返り	各ホーム担任等
２月９日（火）	室戸の地域振興について	一般社団法人　うみ路
２月 16 日（火）	室戸の将来を考える （地域振興のアイデアを考える）	室戸ジオパーク推進協議会

１年次生の「産業社会と人間」では、授業ごとの内容のまとめや感想、気づきなどを「産社ノート」にレポート形式で書いたり、取り組む意欲・態度について６段階表記で生徒自身が自己評価したりする取り組みを行っている。その振り返りを活用して、「室戸学」の成果と課題を検証するとともに、グループで協議してまとめた地域振興に向けたアイデアに関する成果物から、成果と課題を検証した。

○指導上の留意点・工夫

今年度の１年次生は、１学年６３名に対し、県外生が９名と他学年に比較して室戸地域外の生徒が多い。そのため、グループ学習のメンバー構成についても、県外生を各グループに配属し、どの生徒とも交流できるように学年全体でグループ分けを配慮した。また、校外学習では観光客が訪れる場所を見学するなどの工夫を行った。

写真 12　室戸の地場産業についての学習

校外学習以外の授業は、講演（約６０分）後にＫＪ法を使ったグループでの振り返り（約１５分）、グループ発表（約１５分）、講評・まとめ（約１０分）、産社ノートへの記入の流れで進めた。回を増すごとに生徒が授業の流れを理解し、次第に授業者の指示が無くても発表の準備に取り掛かることができるようになった。

○実践の成果

第１回学力向上推進協議会において、「『総合的な学習の時間』や『産業社会と人間』の年間指導計画を見ると、何をやるかというコンテンツは書かれているが、その活動を通して何ができるようになればよいのかについては、具体的に示されていない。」との指摘を受けた。そこで、「室戸学」のねらいを、「地域についての理解を深めること（地域理解）」と、「自分の考えを発表したり、いろいろな意見を受け入れたりすること（言語活動の充実）」の２つに焦点化した。

ⅰ）地域理解について

取り組みを通じて、生まれ育った地域について新しい発見をする地元生徒は多かった。

また、授業ごとに内容を振り返る時間を設けていたが、４回の地域理解学習の内容をどの程度理解しているかを確認するために、クイズ作成による振り返り学習を行った。

写真 13　クイズ作成による振り返り

生徒の振り返りには、

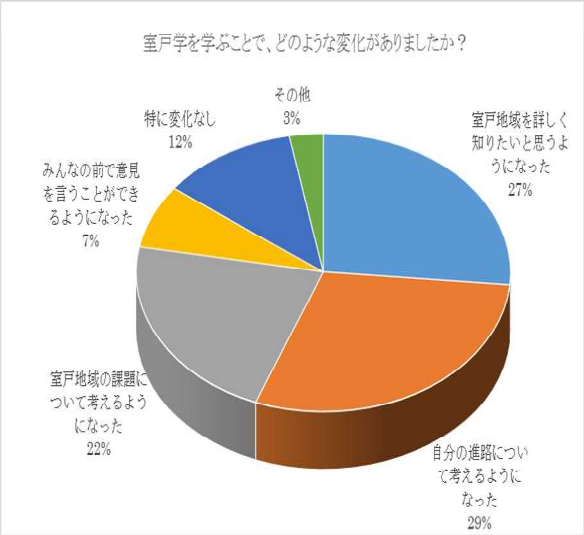
・クイズを作ることで、この学習を通して出会った人達の思いや室戸を知ってほしいという気持ちが伝わりました。たくさんのクイズを作ったり、みんなの意見が聞けたりしたのでよかったです。

・炭について分からないことがたくさんあるので、おじいちゃんに話を聞いてみたいです。

・何をクイズにしたらみんなが面白いかを考えることは、将来保育士を目指す私にとって慣れていかなければならないことだと思った。

といった感想が寄せられた。多くの生徒が内容に関しての気付きをまとめる一方で、なかには、家族の仕事から地元の産業について理解をしようとする生徒や、将来の自分を意識して学習内容を考える生徒もいた。これらから、授業で体験した活動が、生徒の中に活かされていることが分かる。

また、一年間のまとめのアンケートでは、「室戸学を学ぶことで、どのような変化がありましたか」との問いに対して、右のような回答を得た。ねらいとしていた地域理解や発表について肯定的な意見が７１％だったことから、「室戸学」の内容が生徒にとって良い刺激になったと考えられる。また、進路について考えるようになった生徒が２９％いることから、講師の方の地域に対する思いや現在に至るまでの経歴を知る中で、これからの高校生活の過ごし方を考えたり、職業について考えたりする効果もあったと考えられる。一方で、特に変化がなかったと答えている生徒もいるので、これらの生徒にいかに興味・関心を持たせる授業づくりを行うかが今後の課題である。



図表３　アンケート結果

ⅱ）言語活動の充実について

２月には、「室戸の将来について考える」をテーマに、これまでに室戸学で学習してきた内容を踏まえて、各自が地域についての課題意識をもつこと、および今まで得た知識や情報の中から、地域を良くするために、何ができ、何を生み出したらよいか、考えることを目標に取り組んだ。大人でも考え付くのが難しい内容であるため、前週に「室戸の地域資源と地域振興について」というテーマの講演を聞いた後、「室戸にある資源で利用されていないもの」の活用

写真 14　室戸の将来を考える

例を出す学習を行った。その後、室戸ならではの文化・産業などの振り返りを行ったうえで、「室戸にある資源で利用されていないもの」の活用に向けて、自分たちにできることややりたいことについて、グループで意見を出し合う活動を行った。その結果、

・室戸の特産品である金目鯛やびわを使ったパイなどを作って学園祭で販売する。
・ウツボやクジラの食文化を伝える（物を作るだけではなく、地元の良さや伝統を自ら伝える）
・室戸の綺麗な夕陽をポスターに載せたり、写真コンテストを行ったりする。

など、様々なアイデアが出された。次のステップとしては、グループで話し合ってまとめた意見等について、その内容を深めさせ、次の活動につなげていくためのしかけを工夫していく必要がある。

7　今後の課題

（1）基礎学力の定着と学力向上のための授業実践

①数学の指導内容・方法の改善

来年度への課題として、「協調学習の拡充」と「一斉授業の工夫によるグループ学習との相乗効果」を考えていく必要がある。「協調学習の拡充」については、今年度は、グループ学習や知識構成型ジグソー法による授業展開を、難易度の高い問題を中心に行ってきた。来年度は、単元の導入時にも活用できるような題材を精選し、数学が苦手なクラス（生徒）に対してもこれらの学習を意識的に実施できるようにしたい。その際、教材についてはＩＣＴを活用した内容も取り入れるなど、視覚的にも興味・関心を引き出すような内容を考えることで、一層の効果を期待したい。

また、「一斉授業の工夫」については、今年度は、協調学習に繋げる足掛かりとして、一斉授業において「コーネル式ノートを活用した自分の言葉によるまとめ（小単元／毎時間単位）」と、一斉授業の後の「教え合いの習慣化」を行うことで、一定の効果を得られた。来年度は、１月に埼玉県で開催された『未来を拓く「学び」プロジェクトシンポジウム』で報告された「精緻化を引き起こす授業展開」を参考に、思考の流れを目に見える形で残し、振り返る取り組みを、一斉授業及びグループ学習において行っていきたい。

【精緻化を引き起こす授業展開】

○一斉授業において、１つの問題に対して、次のｉ～viの整理を行うことで、思考を目に見える形で残し、振り返ることで理解度を測り、つまづきを把握することで学習内容を定着させる。

ｉ）問題の種類	ii）問題の分析	iii）問題を解くための方法
iv）方法の検証	v）解答を作るための計画	vi）解答

○グループでうえのｉ～ｖを議論することにより、学習内容の精緻化を進め、初見の問題に対しても、適切に処理を行う力を養う。

②英語の指導内容・方法の改善

生徒を自律した英語学習者とするためには、「英語が分かった」と実感することのできる機会を増やしていくための支援・工夫を行っていく必要がある。そのために、アウトプット（英語使用）を急ぎすぎず、その前のインプットやインテイクをいかに生徒たちにとって分かりやすくするかを授業改善の柱の一つとしたい。

次年度以降の課題は、「知識獲得」と「英語使用」を有機的に結びつけた指導を行うことである。例えば、習ったばかりの基礎的な文法事項を、すぐに会話で使わせる。また、言い間違えたところをもう一度振り返り、再度会話をさせる。このようなスパイラル的学習により、英語に関する「知識獲得」と「英語使用」が相互的に働き、知識と表現力を備えた生徒が育成できると考えられる。これまで以上に、実際のコミュニケーションの場面を想定した指導を行うことにより、自分の考えや意見を既習の英語で表現できるようにさせたい。

③家庭学習ノート（ドリカム帳）・キャリアノート（室高手帳）の取り組み

家庭学習ノート（ドリカム帳）の取り組みにより、家庭学習をある程度習慣づけることはできた。今後は、自主的・主体的な学習内容の「質」を意識した改善を図っていく必要がある。

キャリアノート（室高手帳）の取り組みについては、課題として見えてきた活用の意義を生徒に十分に理解させるしかけや、教員の負担感を軽減させるノートのチェック方法の工夫、生徒への指導の統一（ほめるポイントの共有化）などを、学年団を中心に検討していきたい。また、校内研修等を通じて、教員のキャリア・カウンセリングのスキルの向上も図っていく必要がある。

家庭学習習慣と自己管理能力（生活習慣）は密接に関連しているため、家庭学習ノート（ドリカム帳）とキャリアノート（室高手帳）による、よりよい相乗効果が生じるような活用方法を検討していきたい。

④授業改善の組織的な推進

教え合いによるグループ学習や、習得した知識を活用して自分の考えや意見を表現する活動など、生徒の主体的・協働的な学びを取り入れた授業実践により、生徒の学習意欲や理解力の向上に効果が上がっている。また、研修等を通じて、言語活動の充実や主体的・協働的な学びの重要性についても、教員間で理解を深めることができた。今後も各教科内でさらなる授業改善の研究を行うのはもちろんのこと、教員が相互に授業を評価し、感想や意見を授業改善につなげる体制の充実や、授業改善をテーマとした校内研修の実施など、組織的に授業改善を進めるしかけをこれまで以上に整えていく必要がある。

（２）学習意欲を高めるための地域を題材とする体験的学習プログラムの開発

①「ジオパーク学」の充実

今年度からＩＴ・アート系列生徒の必履修科目としたことで、より多くの生徒が室戸世界ジオパークについて学ぶ機会をもつようになった。しかし一方で、生徒数が多くなったために、以前と比較して移動手段（交通手段）の確保が難しく、遠方への校外学習に行きづらくなった。また、ジオパークに興味のない生徒は、なかなか授業に積極的になれないという課題もある。今後は、そのような生徒の意見や思いを授業の中にどのように取り入れるかについても意識していく必要がある。そのためには、「学習内容を事前の知識としてどの程度まで理解しているのか」や「そもそも、なぜ興味がわかないのか」といった生徒達の思考の背景に踏み込んだ質問項目を事後アンケートに反映させ、分析することにより、指導方法の工夫・改善に繋げていかなければならない。

また、ジオパークに興味・関心をもたせるためにも、現地調査を行ったり、地域の方や専門家を講師に迎えるなど、生徒に直接見せたり経験させる際にさらなる工夫を行うことについても検討が必要である。

②「産業社会と人間」の中の「室戸学」の充実

次年度に向けた課題は、次の３点である。

〇振り返りの工夫

第２回学力向上推進協議会では、「外部から講師を招いて授業を行う場合は、事前学習・事後学習をいかにうまく行うかが要となる。特に、外部講師による授業が終わった後の事後指導における『振り返りの濃さ』は重要で、そのために何に焦点を当てて振り返りをさせるかを教員が意図的に仕掛ける必要がある。」とのご指摘を受けた。今年度の取り組みを参考に、次年度に向けて、振り返りのキーワードを明確化したうえで、個人での考察、グループのメンバーとの意見交換、学年全体での発表を一層工夫し、新しいことに気付かせたり、内容をより深めさせたりしていきたい。

〇言語活動の充実

取り組みを通じて一定の成果も出ているものの、今後も「室戸学」の大きなねらいの一つである「自分の考えを発表したり、いろいろな意見を受け入れたりすること」を生徒たちが行うことができるよう、一層のしかけが必要である。

〇系統的な体験的学習プログラムの構築

第２回学力向上推進協議会では、同じ室戸地域を題材とする授業として、「室戸学」と「ジオパーク学」の住み分けを整理する必要があるとの指摘を受けている。室戸高校での地域理解への入り口を１年次での「室戸学」とし、系列によっては２年次の「ジオパーク学」でその内容をさらに深め、３年次の「課題研究」で発展させるために、３年間で生徒に身に付けさせたい力や求めるものを明確にしたうえで、授業担当者だけではなく学校全体での共通認識を持ち、より系統的な学習プログラムを開発し、取り組むことが必要である。